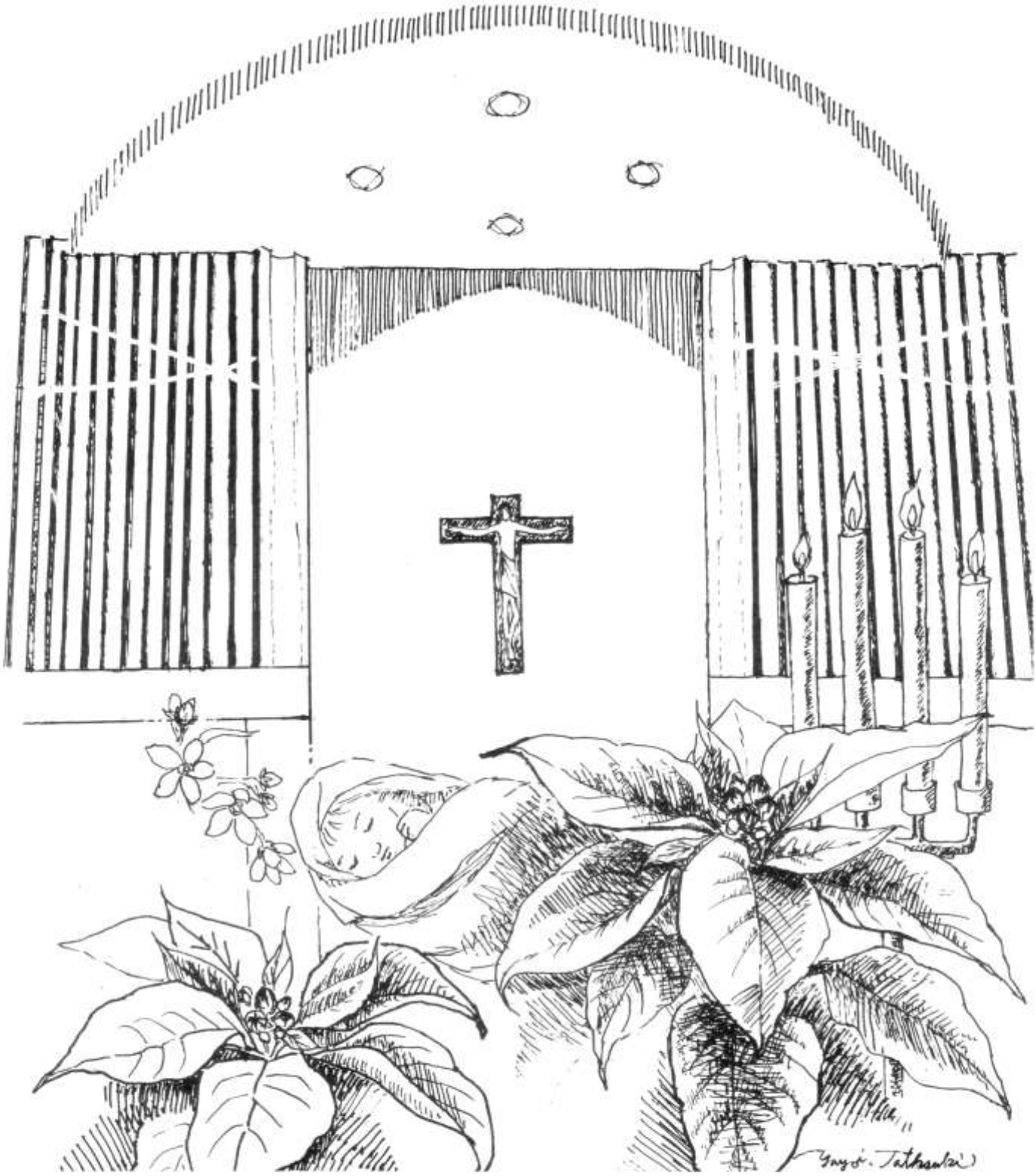
すみよし



２００６年　クリスマス号　　第１７０号

聖　句

ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。

ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。

権威が彼の肩にある。

その名は、「驚くべき指導者、力ある神

永遠の父、平和の君」と唱えられる。

イザヤ 9-5

目次

Copyright © 2006 Sumiyoshi Catholic Church. All rights reserved.

《 クリスマスのメッセージ 》

パウロ神父

闇の中を歩む民は、大いなる光を見た。死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。深い喜びと大きな楽しみをいただきました。(イザヤの預言 9, 1)

この聖書の箇所は、クリスマスのミサの中で読まれます。これこそ希望であります。闇の中を歩むために、希望を抱かなければなりません。さもないと歩かない。ただ死を待つ。しかし、歩んでいるからこそ、希望を抱いていることが分かります。
想像してみて下さい。闇の中を歩むこと、何ですか？どこに向かって歩んだら良いですか？何を探しているのですか？闇の中を歩み始めるとはどんな印ですか？何という意味ですか？
何も探さないでいる人は歩かないでしょう。ただ座って死を待つ。しかし、たとえあわてても、パニックになっても闇の中を走る人は、どこかで希望を抱いている。救いを探している。救いを待っています。
私たちは地上を旅する教会です。光の下でも、闇の中でも歩んでいる教会です。だからクリスマスの時も真夜中に家から出掛けて、生まれた子供のような小さな希望を見に行く。

イエス様が生まれました。2006 年前のことですけど、私たちはその出来事を思い出すと希望に満たされます。
イエス様が生まれた時、どんな人になるか、どんなメッセージを伝えるか、どんな行いをするか、誰も知らなかった。マリア様もヨゼフ様も知らなかった。聞いたことを信じて、なるように頑張りながら、待った。私たちは闇の中を歩むと、どこに行っているかよく分かりません。何を見つけるか、知りません。でも、聞いたことを信じて、頑張っています。
何を聞いた？

神様は私たちを愛して、導いています。だから、神様を信じて、彼の言葉を信頼して、闇の中でも歩んで行きます。マリア様も信じた。マリア様も神様の言葉を信頼しました。だから深い喜びに満たされました。
マリア様はヨゼフ様のいいなずけであった時、子を身ごもっていた。その子を生む前にベツレヘムに長い旅を始めた。子供が生まれた後、エジプトへ逃げた。
その子供は先に死にました。マリア様は、何回も闇の中に入りました。でも、マリア様は決して歩みを止めなかった。ずっと歩み続けました。神様は導いてくださる、神様は慰めてくださることを知っていたからです。

Copyright © 2006 Sumiyoshi Catholic Church. All rights reserved.

私たちも、マリア様と共に、歩んでいます。待降節の間、降誕節の間、四旬節の間、復活節の間に。はっきり先のことが見えなくても、希望を抱いて歩んでいます。だからクリスマスの夜、家から出掛ける。でも、この弱い、小さな子供のような希望は、皆に支えられなければ守りにくいです。

だから一緒に、共同体として、クリスマスの希望を祝います。来年、再来年、この共同体、どうなるかよく分からないが、神様を信じるから、歩んでいます。闇の中にも歩んでいます。そして、皆の道を導いてくださる神様が良いところに届けて下さいます。

クリスマス、おめでとう。

ぼくは 神様をみたことがありません。

みんなは ご聖体のイエスさまに会いに教会へ来ます。

ぼくは 神様が見えたら どんな方かなと想像してみます。

きっと人間の形をしていて ぼくや みんな一人一人に

似ているのではないかと思います。

神さまはいつも すぐそばにいて 愛を込めてぼくをみています。

だからぼくもすぐそばのみんなの中に 一生けんめい神様を探して

神様を見つけたいです。

神さま いつもぼくたちを 見守ってくださって

ありがとうございます。

待降節第 1 主日の祈りより

目次

Copyright © 2006 Sumiyoshi Catholic Church. All rights reserved.

《 目　次 》

☆ 聖　句 ……2

☆ クリスマスのメッセージ パウロ・セコ神父 ……3

☆ 目　次 ……5

☆ パウロ・グリン神父様のお話から ……6

☆ クリスマスの思い出　シスターヨハンナ　金聖直 ……7

☆ 住吉教会この 5 ケ月 ……(8)

☆ 教会維持費について ……(9)

☆ チームだより　レジオ・マリエ ……(10～11)

☆ 写真のページ　ある日のミサの後から ……(12)

☆ 図書コーナーより ……9

☆ 聖書 100 週間のこと ……(14～15)

☆ 聖フランシスコ・ザベリオ師(生誕 500 年を記念して) ……10

☆ 写真のページ

敬老の祝福 ……(18)

集会祭儀司式者勉強会 ……(19)

ステラマリス　2006　船員司牧神戸大会 ……(19)

合同ミサ・ミラグロス・バザー ……(20～21)

　イエスよ、これが私の心です ……(22)

追悼祭 ……(23)

七五三の祝福 ……(24)

待降節メッセージ、教会学校クリスマス会 ……(25)

☆ 信徒動静 ……(26)

☆ 教会日誌 ……(27)

☆ 後　記 ……12

題 字：　千葉 健吉

表紙画：　多月 弥生

太字はこのホームページ掲載 PDF ファイルのページ、カッコつきは原本のページです

Copyright © 2006 Sumiyoshi Catholic Church. All rights reserved.

《 パウロ・グリン神父様のお話から 》

パウロ・グリン神父様のクリスマス黙想会の講話が 12 月 17 日(日)午前 9 時半から聖堂で行われました。マリスト会司祭のグリン神父様は 1955 年来日以降 21 年間、奈良県各地の教会の主任司祭を務められた後、オーストラリア・シドニーに帰国されて著述に専念、著書の収益を元にフィリピンの貧困者への医療援助を行われています。

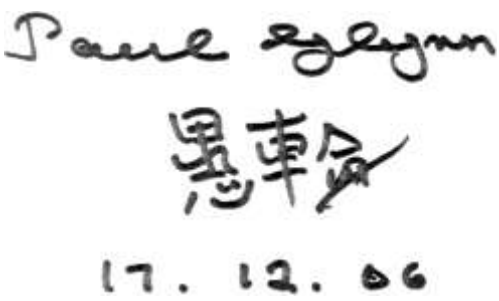
グリン神父様のお話は日本文化、特に漢字への深い造詣と日本人への優しいまなざしに満ち、鴨長明や松尾芭蕉の名前まで出てきました。
神父様のお話に出てきた色々な漢字からは沢山のことを教えられました。

燔祭（はんさい・旧約聖書に出てくる言葉。神への焼き尽くす捧げもの）
グリン神父様が最も心に留められた日本人の一人、故永井隆博士。高校時代無神論者だった彼は妻・緑さんとの出会いによって受洗。長崎医大教授であった 1945 年 8 月 9 日、原爆により被災して、緑さんを失い、自らも被爆する。

小倉の替わりに長崎に落とされた原爆。その犠牲によって戦争は終わったが、妻の緑さんは亡くなった。長崎の犠牲も妻の死も彼の燔祭として神に捧げられた。ミサの時、“今日私たちが捧げるいけにえをあなたの心に適うものとして受け入れてください”と祈る。
信仰の深い人の死は静かで美しい。永井博士は白血病の為、肉体的には苦しんだが顔には出さず、神への喜び、驚き、素晴らしさについて語った。

小さな**蕾**（つぼみ）の中に隠された大きなエネルギー（**雷**）は原子力を以ってしても大自然の働き＝神の恵みに勝つことは出来ない。日本人の先祖の多くは仏教徒で**念仏**（ねんぶつ）を唱えていた。**念**は今の心。今この祭壇にキリストがいる。十字架のキリストの左右の二人の泥棒は、昨日の失敗と明日の不安の間で苦しんでいる。復活したキリストは弟子達に現れて「あなた方に平和があるように」と言って聖痕を示された（ヨハネ 20 章)。みんな心に傷を持っている。苦しみのない人の心は深くない。

イエス様の平和の約束は傷（苦しみ）のない平和ではない。平和、平和と叫ぶ前に、先ず自分の心を癒し、自分の家庭のトラブルを治めてから初めて外に向かって平和を叫ぼう。自分の傷をキリストの傷と共に捧げる時、その心には泉がわき出してくる。



編集部

目次

Copyright © 2006 Sumiyoshi Catholic Church. All rights reserved.

《 クリスマスの思い出 》

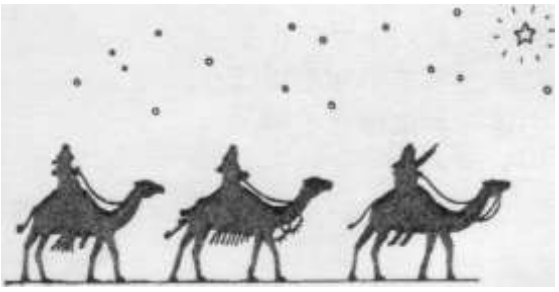
聖マリアの無原罪修道会　ヨハンナ　金聖直

クリスマスの思い出は何かと聞かれたらやはり２０年間韓国で過ごしたクリスマスを思い出します。修道院のすぐ横に大きな教会があり信者数は登録上 10,000 人を超します。毎日のミサも朝６時、10 時、午後７時の３回です。日曜日はミサが６回、子供たちのミサは土曜日にあり、また中高生だけのミサは日曜日朝９時です。家族ぐるみでミサに参加します。韓国では家族の中に一人でも司祭や修道者がいるなら必ずと言っていいほど洗礼を受けます。家族の交わりをとても大切にする民族です。クリスマスと復活には家族ぐるみで洗礼を受ける人も多いです。

韓国の冬はとても厳しく普通はマイナス８から１０度ですが、それにもかかわらず毎日のミサも朝６時には多くの人が参加します。仕事に出かける前にミサにあずかる人が多いです。学生や若者も参加します。とても印象的なことは、子供たちの侍者が必ず朝６時のミサに２人は居るという事です。

クリスマスのミサは真夜中の１２時に捧げられるのですが、１０時からは御言葉の黙想が始まり、朗読するだけでなく御言葉のコメントがあり、静かな音楽をバックに黙想します。それが２時間ほど続き、そのあとミサが始まります。１２時のミサにあずかるためには席が足りないから、9 時ごろから人々は聖堂に入ります。その日、教会は人があふれ聖堂には入りきれないので、ホールでスクリーンを通してミサに参加します。クリスマスは多くの方がミサに参加します。待降節もみんなで馬小屋の準備をしたり、幼子イエズスに捧げる祈りや犠牲、貧しい人を助けたり老人を訪問したりして、いろんな奉仕活動が教会の中でも外でも行われます。韓国の教会は皆がとても積極的で、教会の中でいろいろな活動や研修があり、よく分かち合います。２４日クリスマスイヴのミサは 10 時から御言葉の黙想が始まり、12 時にミサが始まり終わるのは２時３０分ごろです。祭壇で侍者をする子供たちは１２人いましたが、そのうちの３人は眠気のために椅子から転びそうになり、皆をはらはらさせました。隣に座っていたお年よりの方は、すやすや幼子のように眠り始めましたがそっとしておきました。わたしも２時間の黙想のとき眠くなり、隣の姉妹に声をかけていただきました。

クリスマスのミサは、それはとても荘厳で、聖歌隊もすばらしくまるでコンサートに来ているかのようでした。それぞれのチームがよく準備します。聖堂の案内係りの人は、韓国の着物である韓服で案内します。クリスマスの日には、多くの人が韓服を着用しお祝い日であることを意識します。



Copyright © 2006 Sumiyoshi Catholic Church. All rights reserved.

ミサのあとには韓国の餅が一人ひとりに配られ、とてもほかほかあたたかい餅で、それをみんなで食べ、婦人会の人が準備した韓国の甘酒や食べ物を皆で分かち合います。韓国では、教会のお祝い日には、必ず韓国固有の食事を皆で分かち合います。家に帰るのは４時ごろになります。次の日２５日は祭日ですので、有難い事に休みです。24 日にミサに行けない人のため朝６時のミサはありませんが、その日も５回ミサがあります。神父様たちはすこしお疲れのようでしたが。

クリスマスは、教会でも修道院でもみんな一つの共同体に集まり、それぞれの出し物、踊り、劇、歌、ゲームなどとても楽しく有意義に過ごしたこと、フルーツケーキも修練者と共にたくさん作り、皆のためにプレゼントを作ったこと等が、懐かしく思い出されます。一番の思い出はやはり、クリスマスを毎年迎えましたが、その年ごとに幼子イエズス様からの恵みがありました。そしてマリアさまのおかげで、イエズス様が私たちのために生まれてくださったことを心に深く留め、いつもどんな時にも感謝の心で生きたいと思います。

クリスマスそれはイエズスの誕生とともに私の誕生でもあります、
幼子と母マリアの貧しさ、小ささ、単純さが神の恵みにより私の日々の生き方、人々とのかかわりの中で実現できますように。

考えることは、大切です。

その考えひとつで困っている人を助けたりできる。

すごいことです。

その考えひとつで時には人を傷つけることもあります。

私たちの考えの中に、神さまの光がありますように

みちびいてください。

どうぞ 私たちの考えが、まわりの人を

はげます愛の道具になるように

いつも照らしてください。

待降節第２主日の祈りより

目次

Copyright © 2006 Sumiyoshi Catholic Church. All rights reserved.

《 図書コーナーより 》

新しい聖堂と共に、図書コーナーも二階に新しく出来ました。新しい本も購入し充実を図っていきます。貸し出しも出来ますのでどうぞご利用下さい。

◎　目からウロコシリーズ　（計6冊）　　女子パウロ会刊

祈りの学校校長　来住(きし)英俊（御受難修道会司祭）著

＊　ロザリオの祈り再入門　・・・　ロザリオは手で祈る祈り。ロザリオに魅力を感じながらも挫折した人たち、縁遠いと思っている人たちにこの本がロザリオの祈りに親しむための助けになることを願っています。

＊　とりなしの祈り　・・・「 とりなしの祈り」とは、自分以外の人のために神に願うことです。とりわけ、苦しんでいる人たちのために祈ることをいいます。私が提案する「とりなしの祈り」ば、ロザリオを用いるものですから、「ロザリオの祈り再入門」と合わせて読んでくだされば理解も増すと思います。

＊　ゆるしの秘跡　・・・　この本は「ゆるしの秘跡」という「信仰生活の道具」の「利用の手引き」です。信者が自分の信仰の旅路のために、この秘跡の場をどのように活用するかという観点から書かれています。

＊　詩篇で祈る　・・・　この本は、思いも言葉も信頼も貧しい私たちが、詩篇の書葉に乗せて自分の思いを神に注ぎ出して祈るという視点で書かれています。

＊　キリスト者同士の人間関係　・・・　キリスト者同士の人間関係を真に実りあるものにするためのキーワードは「愛とゆるし」そして「選択と識別」です。「選択と識別」だけなら冷たいビジネスになってしまいます。しかし「愛とゆるし」だけでは、たぶん惰性に陥ってしまうでしょう。

＊　ミサのあずかり方　・・・　これは典礼チームのための本ではなく会衆のための本です。つまり、現在の小教区で普通に行われているミサを前提として、それにどうあずかるかを考えています。〈本書内より）

◎　対話の達人、遠藤周作　Ⅰ　Ⅱ　　女子パウロ会刊

遠藤周作著

本書は、１９８０年代女子パウロ会発行・月刊「あけぼの」誌に掲載された「遠藤周作・連続対談」の一部を収録したものです。（本書より）

よみがえる遠藤周作の名インタビュー。どんな人にも心を開き、聞かせることのできた話術が共感を呼ぶ。　（本書帯より）

編集部

目次

Copyright © 2006 Sumiyoshi Catholic Church. All rights reserved.

《 「東洋の使徒」聖フランシスコ・ザベリオ師 》

生誕 500 年を記念して

１２月３日にお祝いする聖人は日本のカトリック史上最も深い関わりのある聖フランシスコ・ザベリオ（ザビエル）です。我が国に、初めてキリスト教への門戸を開いて下さった宣教師として中学校の教科書にも紹介されておりました。

聖フランシスコ・ザベリオは１５０６年４月７日、スペイン・ナヴァラの由緒ある貴族の家柄にお生まれになり、パリの大学で、当時としては最高の教育を受けられ、ご両親はもとより、ご本人も将来の立身出世を夢見て勉学に励まれました。ところが同じ大学にロヨラの聖イグナシオ（イエズス会創立者）が在学され、親交を深めて、イエズス会初の６名の司祭の一人として、新しい人生を踏み出されたのです。この世の名誉、財宝よりも、命をかけて神の愛を伝えるという道を選ばれたのは１５３３年、２７才の時でした。

司祭としてイタリアで貧しい病人の看護をして働いておられた時、病気の為に行く事が出来なくなった友人の代理として、印度のゴアに派遣されることになりました。通訳を使って貧しい人たちに布教をし、当時月に千人に及ぶ多数の受洗者がおり、彼の熱心な祈りと苦業は数々の奇跡を呼びました。

印度のマラッカで、聖フランシスコ・ザベリオは流刑となっていた日本人、里美彌次郎（アンジロー）と運命の出会いをなさいます。日本が美しい国で、人々は勤勉善良であると聞き、聖フランシスコ・ザベリオは日本への布教に憧れを止めることが出来ず、１５４９年６月４日、マラッカを出発しました。

鹿児島に上陸されたのは同年８月１５日の事でした。彌次郎も同行し早速布教を始めましたが、予期した程実りはありませんでした。と言うのは当時、日本は一国一城の主である各大名の権限のもとにありました。漸く布教の許可が出たのが山口で、若い藩主、大内義隆から一寺を贈られ、これを教会としたのが我が国で最初のカトリック教会であると言われています。

聖フランシスコ・ザベリオはその後何とかして都に出て、布教の許可を貰いたいと苦労の末京都に出て来たものの、当時応仁以来の戦乱の時代で、土地も人心も荒れ果て、期待した天皇の権力も失われていて、師の努力はなかなか報われませんでした。来日２年半の後、聖フランシスコ・ザベリオは俄かに東印度管区長として心を残しながら日本を去られる事になります。

中国へ向かう途中、広東に近い三州（サンシャン）島まで行かれた時病に倒れ、小さな十字架を手に孤独な４日間のお苦しみの末、その気高い魂は天の御父の許にお帰りになりました。御年４６歳、1552 年のことでした。

Copyright © 2006 Sumiyoshi Catholic Church. All rights reserved.

日本はその後「キリシタンの世紀」と呼ばれる時代が続き、宣教師が次々と渡来され、南から北まで沢山の教会が全国に建てられました。しかしその後、幕府は方針を変え、キリスト教は厳しく禁止されました。迫害の嵐が吹き荒れ、「２６聖人」を始め無数の殉教者の尊い血が流され始めたのは聖フランシスコ・ザベリオの来日から４０数年後のことでした。迫害は明治の始め頃まで激しく続きましたが、今までの鎖国（外国排斥運動）の時代から、突然世界に向けて開港を決意した明治の日本政府は、「キリスト教を弾圧するような野蛮な国とは国交をしない」と諸外国に厳しく言われて、長い間のキリスト教弾圧は漸く終わりを告げました。

今から５５年程前、聖フランシスコ・ザベリオの「右手」が立派なガラスのケースに納められ、世界を廻ってはるばる日本に旅をしてこられました。関西では確か西宮球場で盛大な御ミサが挙げられました。４５０年振りに、再び愛する極東の国、日本に上陸された聖人は、この近代化された日本、津々浦々に建てられた約９００ヶ所のカトリック教会、大勢の司祭、修道者、キリスト教信徒をご覧になって、さぞや感慨無量でいらっしゃったことでしょう。かつて日本の風土と人々を愛し続け、上司への手紙に「日本は我が喜びである」と書き送られたお方でした。

フランシスコ・ザビエル（ザビエル記念聖堂）

ザビエルの署名

天国の聖フランシスコ・ザベリオ
どうぞこの日本の国を、人々をお護り下さい。
全ての宣教師方、神父様方、修道者の方々
お一人ひとりの上に
豊かな主の愛と御恵みが注がれますように
お祈りください。　　アーメン

編集部

『カトリック教会の先達として、
布教に信仰に生涯を送られた方々の
連載を始めます。
私たちも祈りの中に主の道を
歩んでいくことが出来ますように。』

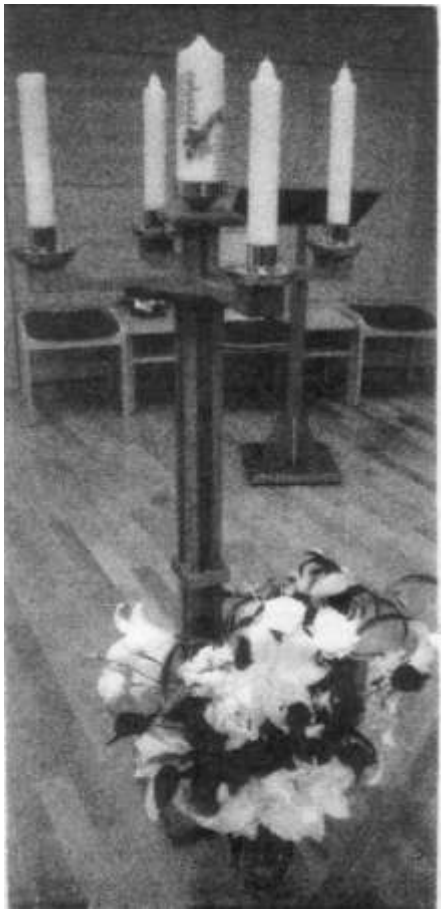
目次

Copyright © 2006 Sumiyoshi Catholic Church. All rights reserved.

【 後 記 】

年齢(とし)をとると新しい環境に慣れにくいものです。
日曜日の朝、目がさめると、私の脳は御ミサをイメージします。
ところが、それはまだ幼稚園の教室です。
「ぬぎ易い靴をはいて行かなくちゃ」・・・
オット　りっぱな聖堂が出来ているんだった！
それから足取りも軽く教会へ参ります。ピカピカの聖堂の真ん中で 50 年前の、いわれのある十字架が、今は古めいて立っています。やっと住吉教会だと落ち着く。
半円形の内部席は、どこを私の居場所に・・・なんて選べる程広々として嬉しい。
なつかしい十字架の道行きも陶板に衣替え。クリスマスにはステンドグラスも入るのでしょうか。
私の祈りの場としてのイメージも、だんだんとふくらんで参ります。　　本田

「小聖堂は祈りの場です。沈黙の内に祈りましょう」
この表示のある小聖堂はご聖体のいらっしゃるところです。小さな明かりがともっています。昔は炎の出るロウソクでしたが現代の消防法で無理になりました。
正面の聖櫃に神様の存在を認め心静かに祈りたいものです。　　松田



「すみよし」第 170 号
発 行 日 ：　2006・12・24
編集・発行:　広報チーム
編集責任者:　竹内 和美
発 行 所 ：神戸市東灘区住吉宮町 2－8－23
カトリック住吉教会
TEL:　078-851-2756
FAX:　078-842-3380
http://www.sumiyoshi.catholic.ne.jp
製版・印刷:　信徒有志

目次

Copyright © 2006 Sumiyoshi Catholic Church. All rights reserved.